

# 非言語情報を用いた新たな経営史分析手法の提起

## — 渋沢敬三の社会経済思想と日本実業史博物館構想をヒントとして

川 越 仁 恵

### 1. 問題の提起

経済人渋沢敬三が没して50年余りが経つ。戦時中の日銀総裁・戦後の大蔵大臣などを務めた渋沢敬三は、没後50年プロジェクトなどにより、脚光を浴びつつある。

渋沢敬三(以下、敬三)研究を振り返ると、経営史学では意外にも取り残されたテーマがあった。それは敬三が膨大なエネルギーを費やしながらも実現しなかった「日本実業史博物館」構想と収集されたコレクションを通じた経営史学の新たなアプローチの可能性である。

これについて島田昌和とともに共同研究を行っており、上記の問題提起は、島田(2016a)によって企業家研究フォーラムで口頭発表がなされた。本稿を始めるにあたって要点を示す。

「日本実業史博物館」(以下、実博)は栄一の没後、1937年から敬三の強いイニシアチブによって構想された。資料数も豊富ながら、コレクションはこれまで経済史学・経営史学では積極利用されてこなかった<sup>(1)</sup>。その理由は、経営史学におけるアプローチの慣習にある。経営史はこれまで、分析の対象や実証の論拠にはおもに文書や帳簿といった文字情報、金額や数量でデジタル化された量的な情報を用いてきた。敬三が企図し実博で収集させた資料には、器物・絵画・広告などじつに多くの文字や数字でない資料、文書以外の資料が含まれている。経営史学ではこのような非言語情報や視覚情報の活用に対する方法の模索がなかったので活用してこなかったと思われる。他方、実際の経営には色彩やデザインで表現されたもの、たとえば絵画や写真で表現された広告物、製品として世に出た織物のデザインや図案・配色など、文字や数字でない情報が時として重要なファクターになっているのは自明のことであろう。それに着眼せず活用せずとも、経営史・経済史の解明は十全に行われると言えるのだろうか。その後さらに島田(2016b)は、非言語経営史要素を数少ないとしながらも探し出し経営史学会第52回全国大会で指摘している。流通史では石井寛治(2003)、山本武利・西沢保(1999)、石原武政・矢作敏行編(2004)、神野由紀(2015)、経営史テキストでは柏谷誠(2012)が技術基盤とデザインについて言及し、とくにファッションに特化した先行研究では田村均(2004)がデザインの創意工夫とそれを実現するための技術革新を主要テーマとしている。

実博コレクションの積極利用が足踏みしている理由のもう一つは、資料公開の準備が最近整ったばかりだということもある。その結果、戦前期に集めた文化文政期から大正期の約38,000点の経済史資料が、経営史研究の分野ではほぼ未活用である。

それでは文字や数字でない物的資料を経済史・経営史学の実証の根拠に活用するための、方

法の足がかりは何らかあるのだろうか。それは実博のコレクション形成を通じて敬三の経済観を再構成することが最も有効なアプローチであると考ええる。

## 2. 本稿の目的

こうした問題意識にしたがって、本稿では敬三の経済観の再構成を、敬三の研究拠点だったアチックミュージアムと実博の関係史の中で行うこととする。

敬三は文書や帳簿でない資料を「実物」資料と呼んでいた<sup>(2)</sup>。それ以前に敬三は民衆の生活道具である民具資料を集めた「アチックミュージアム」(以下、アチック)を設立しており、敬三の実物への関心はそのときすでに見て取ることができる。敬三は、日本実業史博物館を構想する前、草創期の民俗学に深く関与し彼の設立したアチックはその後の民具研究に多大な影響を与えた。

アチックと実博の先行研究をみると、民俗学学説史では民俗学者・渋沢敬三としての評価が中心で、アチックに関しては構想や経過・実績と民俗学への影響が研究されている。この方面では厚い研究の蓄積があるものの、その後敬三が強いイニシアチブをとって構想する実博とは、深い関係では論じられていない。たとえばアチックの展示の中で実博コレクションが紹介されたのは、2001年国立民族学博物館での企画展「大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」が早い例であるが、図録には山田哲好(2001)によってアチックの関連資料として解説が付されている。また横浜市歴史博物館では2002年特別展「屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問」が開催され、図録の一節で刈田均(2002)が実博の歴史と背景に触れるに留まる。それより遡って1988年渋沢史料館で開催された特別展「屋根裏のはくぶつかん—渋沢敬三と民俗学」は、図録での内容はアチックのこのことのみで構成されている。

同時に実博研究においても、アチックには簡単に触れておくだけで実博への影響などは詳しく述べられていない。たとえば実博資料を所蔵している国文学研究資料館では人間文化研究機構連携研究として研究テーマを「文化資源の高度活用」研究課題を「『日本実業史博物館』資料の高度活用」と題して取り組んだ。この成果となる中間報告には青木睦(2008)が、アチックについては敬三が資料形成に大きく貢献したもう一つのコレクションとして触れている。もう一つの中間報告として行われた国文学資料館特別展「日本実業史博物館旧蔵コレクション展—紙」では、図録にも青木(2007)が同趣旨の説明を述べるとともに、近藤雅樹(2007)がアチック資料の一部を使って資料に即した短い論述を書いているのみである。渋沢史料館企画展「日本実業史博物館をつくりたい!!」図録(2001)、最近の著作である大谷(2015)でも、実博との関係において触れるのみであった。唯一、社会学者原田健一(2010)が、敬三の実業家としての考え方が実博のコレクション形成に影響を与えたとして論じる中でアチックとの違いに触れている。ただしアチックと実博との関連は原田論文の中心テーマではないため、あくまで実博を論じることに軸足を置いている。原田論文については8(2)で検討する。

したがって、アチックはアチック単体、実博は実博単体でまったく別の存在とみられている感が否めない。しかし実博はアチックの後に企画されたものであるから、アチックから得たことを検証しつつ、実博構想がなされたものとするのが自然であろう。これはアチックと実博を、民俗学と経済史という属性の違いから非連続なものとしてとらえたために、連続性を積極的にとらえずそれぞれの研究に留まっていた。アチックを構想した敬三と実博を構想した敬三、これではあたかも、二人の敬三が存在するようである。アチックと実博を連続性の中でとらえてみると、今までとは異なった敬三の経済活動を見る眼、彼の社会経済思想が見えてくるのではないか。

本稿では2つの視点を持って資料を検討する。まず一つめは、アチックを日本実業史博物館の前史として位置づけ、実博構想に際しアチックから得たものを反映していると前提する。二つめは、敬三を経済史において非言語情報を活用した研究の先駆的存在ととらえてみる。すでに非言語情報研究を実証資料としてとらえてきた民俗学・人類学・社会史に対し横断的に目を配りつつ、敬三が非言語情報を実証資料と位置づけて研究を進めた拠点、実博とアチックを検証する。以上2点の見方をもって敬三の経済観に迫ってみたい。

### 3. 非言語資料研究の先駆、敬三とアチックミュージアム

敬三は経済人として日本経済をけん引する傍ら、アチックミュージアムを設立し、日本実業史博物館を構想する。アチックは生活用具、実博は広告・絵画・番付・看板など、両方とも収蔵品には「実物」資料をはじめ数多くの非言語情報資料を含んでいる。

敬三は、幼いころから生物学に親しみながら、大学時代には経済学を学び経済史の卒業論文を書く。祖父・栄一の後を継いで経済人として歩み始めた敬三だったが、横浜正金銀行に勤務してロンドン滞在中の1923年に民俗学者・柳田国男に会<sup>(3)</sup>い民俗学にも関心を持ち、帰国後の1925年アチックを設<sup>(4)</sup>立する。1929年正月敬三が最初の奥三河訪問以降、収蔵品が幅広くなり民俗学の研究らしくなっていく。

1925年から、敬三は同人たちと足半(あしなか)という特殊な草履の研究を始めた<sup>(5)</sup>。敬三は、足半を研究対象とする意義を以下のように記している。

(前略)まず第一に、足半の伝承遺存がかつて想像されし以上に豊富であり、したがってわが日本民族全般の生活様式に異常に深くかつ大いに関連のあることを知る。(中略)全数量のかなりの豊富さと地理的分布の広汎ならびに形態、名称、方言、付随説話、俗信等がその多様性を示す。また歴史的資料を顧みる時、足半の遡古可能時代の案外古きことならびに文献種目の存外多いこと、その記載項目の多種相に驚く。[渋沢敬三(1936)、236頁]

敬三はこの研究にちからを注いでいた。敬三はアチック所蔵の347点の足半の計測・構造・製作技術などを調査し、名称方言、足半をめぐる説話俗信、足半を使用する人々が描かれてい

る絵巻、文献などを使って、足半を包括的にとらえようとした。足半の収集は1933年～1934年に増え、1935年にピークを迎え、それを素材にこの研究に取り組んだ<sup>(7)</sup>。研究の成果は『民族学研究』第1巻第4号(1935年10月)と第2巻第1号(1936年1月)に発表され、1936年5月には『所謂足半に就いて(予報)』として刊行された。足半という実物資料・非言語資料を真正面から取り上げ、絵巻を併用して実証を試みた。この研究は民具研究のその後の基礎となった。

ちょうどこの頃、アチックでは足半だけでなく民具全般の収集数が1935年から1937年まで年間1,000点を超え、収集そのものがピークに達していた<sup>(8)</sup>。

一方で敬三はアチックでの研究の悩みと反省も述べるがあった。敬三はアチックの同人・早川孝太郎を応援し、早川の著書『花祭』は1930年に出版される。しかしながら敬三は「早川君の花祭の力作はどこまでも感心するが、自分に物足らぬ感じが今なおしているのは、この行事に対する社会経済史的な裏付のなかったことである。しかしこの問題を早川君に求める方に無理がある。」と出版後の1933年に語っている<sup>(9)</sup>。

また研究を進めるうち、各地からアチックを知っていきなり送付される寄贈品も含め「数千の民具」は「量的にも地方別的にも多彩多様となり」足半のように特定分野を狭くかつ深く掘り下げることができる状態ではないと判断した。また使用時期と使用地域を住民たちから確実に聞き取っていく調査の難しさを改めて悟り、『民具問答集』の「まえがき」で以下のように述べた。

自分が今春南秋川に行った折、変わった形式(西洋式菱形)の凧があった。もし訊かなかつたら、最近のこの村に入り来たつたこの種の凧が昔から秋川にあったと速断したかもしれない。また先年八戸地方の山地を旅した時、いかにも古めかしい、棒に藁をしばってその先を焼いたカガシ(かかし 筆者注)が至る所の畑に立っていた。これも訊かなければ、これが二年前から急に流行しだしたカガシであり、以前はこの地方に全然見かけぬものだとは思わなかつたであらう。(中略)民具の用い方については更に複雑で、どこまでが共通でどこまでが特殊だか、なかなか見当がつかない。(中略)えて速断に陥りやすい傾きがあり教えられることが多い。またある土地である婆さんにもものを訊くと、その答えはその土地でのものでなく、その婆さんが嫁ぐ前の遠方の生家地方のことである場合も想像しうる。こんなことを書くと際限がないが、全く我々は一つの事実の基点とか観察の焦点とかいったものを、どこに置くかに迷わざるをえなかつた。[渋沢(1937) 252頁]

我々が少しはものを知っていると思っていた錯覚に対する懺悔なのである [渋沢(1937) 251頁]

こうして足半研究という一定の成果を挙げつつ翌年1937年5月の『民具問答集』刊行においては、効用を知った上での限界を真摯に受け止めた。「全く我々はあまりに早急に形成された概念的資料の雑多に悩むとともに、真実の生な資料の極めて貧弱なるに苦しんでいる実情であ



<sup>(10)</sup>る。」と述べ、資料の質や種類が拡散傾向になってしまったあまりに、焦点が定まらないよう  
うかがえる。

#### 4. 日本実業史博物館構想の始まりとアチックミュージアムでの収集活動終了

1931年に祖父・栄一が逝去、竜門社では栄一の飛鳥山邸宅である暖依村荘<sup>あいいそんぞう</sup>の公共的活用策として栄一を記念する施設の建設案について、1937年5月「暖依村荘利用に関する委員会」(以下委員会)を設置し検討を開始、敬三にも委員を委嘱した。以後ここで実博の件が話し合わせ決定される。敬三は委員就任後同年5月～7月の間に「一つの提案」として近世経済史博物館を構想し、これは3部門に分かれて「青淵翁記念室」「肖像室」そして「近世経済史展観室」を計画した。さっそく準備室設置に着手、収集の実務を依頼し同年6月には資料購入をスタートする。「一つの提案」に土屋喬雄は標本の収集対象時期について、明治末年を下限にしていたところを、顕彰する栄一の活動時期に合わせて大正期まで延長する修正意見を提示した。それをベースに同年7月に委員会で審議の結果「渋澤青淵翁記念実業博物館建設の件」を具体化することが決まった。<sup>(11)</sup>同時にアチックの民具収集活動が終了する。<sup>(12)</sup>1939年アチックの収藏品すべてが日本民族学会付属博物館へと移管される。

アチックはその後研究施設として、水産史研究、絵画資料研究の深まりが顕著となる。敬三は足半研究の経験を踏まえて、文字では伝えにくい道具の使用状況や生産その他の営為所作は絵の上にこそ残っていると、非言語情報である絵巻物などを利用することを提案した。同時に、実物単独では年代の測定が困難であるという難点も、その道具が絵巻物に描かれていればその成立年により編年は立証できると考えた。アチックの同人であり早い時期から絵巻物研究にたずさわっていた有賀喜左衛門(1984)によると、1940年に絵巻物研究会が発足し、絵巻物の模写とともにそこに登場する道具や動作に一つ一つ索引番号をつけ解説を付した。戦火で一切を灰燼に帰すものの敬三の切望により研究会は再開、『絵巻物による日本常民生活絵引』として敬三の没後1965年に刊行が始まる。アチックミュージアムはこうして、民衆の生活用品を対象とした物質文化(民具)の研究を主軸とした民俗学の一大拠点となった。

実博はその後、清水組と設計の協議を重ね1939年春ころまでには設計図が出来上がっていた。<sup>(13)</sup>1939年は栄一誕生100年にあたるため、それを機に5月13日に「渋澤青淵翁記念実業博物館」建設地鎮祭を挙げる。その後も「日本実業史博物館」の名称で設立に向け収集が継続されたが、建築資材の統制は厳しく竣工には至らず、1944年「非開館」を決定した。

1937年から収集され続けたものは1951年文部省史料館へ移管され、総数は19,526件37,853点と発表されている。<sup>(14)</sup>このうち文字によるいわゆる文書資料や書籍に比して、概算でも半数以上が器物・絵画・広告・看板などの実物資料・非言語資料という構成になっている。

#### 5. 敬三の目指した民俗学と柳田国男の民俗学との比較

敬三が民俗学に出会ったのは、その勃興期にあたる。民俗学の骨格を築いたのは柳田国男

(1875～1962)である。その後多数の優れた民俗学者が生まれ、その骨格に肉がつきました骨格そのものを改良してきた。敬三もその中の一人といえよう。敬三の目指した民俗学は、柳田の目指した民俗学とは決定的に異なった部分があった。

柳田研究に詳しい福田アジオ(2002)は以下のように分析している。日本の民俗学とは、近世における文人の随想、見聞録がその原型である。それが明治期には土俗調査、郷土研究の進展を経て、柳田國男によって民俗学という学問として形成される。柳田が民俗学を始めたのは1910年前後であり、民俗学の確立期は1930年代のことである。敬三は1923年、民俗学者柳田國男にロンドンで会い、生物学から民俗学へと関心が広がっていく。今では広く普及した「民具」という用語も、敬三がアチックの活動の中で作った。

福田は「渋沢の研究活動は明らかに柳田の民俗学を意識して組み立てられていた。柳田が軽視した事象を取り上げ、また方法的にも拡充した。」として敬三の民俗学の4つの特徴を述べている。第一が物質文化の研究であり、日本の民具研究は、アチックを中心に発展してきたとしている。柳田は、行事や儀礼に関心が向いていた。柳田が着目しなかった物質文化を、「民具」という名のもとに民俗学の研究テーマとして確立した。第二は、非言語情報である物質文化を研究しながらも同時に文字資料を重視したことである。柳田が歴史学を意識して民俗学の学問的自立を図るために意図的に文字資料を排除していたのとは対照的であった。しかしながらこの文字資料は「それまでの歴史学者が扱ってきたような文書・記録ではなく、人々の日常の中で記録された文字資料であった。」とし、歴史学的手法とも異なると強調している。第三には漁業・漁村の研究、第四に地域の全体像の把握を挙げている。

これに付け加えるならば、敬三は民俗学と経済史を同時に考えていたといえよう。原田健一(2010)は、シリーズ『明治文化史』において、敬三が監修した『生活編』と柳田が監修した『世相編』を比較して、対象は似ていて綿織物業など取り上げるトピックスが一部同じであるにも関わらず、視座の違いで内容が似ても似つかないという指摘している。敬三のものを見ていく眼は実利的・即物的であり物と物の交換や経済、あるいは制度に向いていたといい、一方柳田は同じ民具を話題に取り上げても使う人の感覚、心に記述の中心を置いた、という。

アチックの同人だった山口和雄(1992)は敬三の卒論である「本邦工業史に関する一考察」では資料として遺物や民間伝承がかなり使われており「渋沢はすでにこの頃から民俗学と経済史の共生を考えていたようである。」と述べた。

これは柳田民俗学との違いというより、ほかの民俗学者と比べても異なる発想だったといえよう。この部分がアチックとともに実博も生み出した敬三らしさといえよう。

## 6. 実博に活かしたアチックでの経験

アチックでの経験は、日本実業史博物館の収集方針に活かしている。アチックの活動全体では、敬三はさまざまな試みを行っているが、その中でもとくに実博構想に活かしていると思われるものを2つ提示してみる。

## (1) 物を通しての実証

敬三は「民俗学に、生物学的とでも云ひ度い様な実証的研究があまり用ひられておらぬことをいささか不満に思っていた<sup>(15)</sup>」。これを指して有賀は「敬三の実証的研究とは実物を通しての研究である<sup>(16)</sup>」と評した。では敬三の考えた生物学的な実証研究とは、どのようなものだろうか。足半の研究にはそれが現れている。

敬三がちからを注いでいた足半の研究は1936年『いわゆる足半について(予報)』(アチック・ミュージアム編1936)として刊行された。共同研究ではオーガナイザーに徹し、あまり自身では論じない敬三であったが、この時の「摘要」には足半についての分析を長い文章で述べている。同書は関心がじつに生物学的であって、まず構成からそのことがうかがえる。347点の足半の標本を用いて、法量の測定、内部構造、履物の役割を果たすのに重要な鼻緒と横緒という部分の詳細解説、製作技法、使用法と目的に、全体の約3分の1を割いている。これは、生物学の方法を応用した足半の分岐分類ともいべき考察である。あたかも身体の器官のはたらきと個体の進化が連動するように、足半使用時の人の動作とそれに対応する足半の構造・形質から、原始的な祖先形質(原始形質)と、後に出現した子孫形質(派生形質)とに分けようとした。そのために外側だけでなく紐の編み込みや芯繩の位置といった内部構造を知るため当時では珍しいレントゲン技術を使って足半を撮影した。そして原始か派生かという編年の把握をした後で、年代の特定をするために次は文献を用い、足半の画像や使用例からどの形質がどの年代にあっているかを割りだそうとした。これが全体の約3分の1に相当し、合わせると考察の半分以上は、生物学的な実証に充てられていた。

敬三はまとめとして生物学用語を用いながら全部で9つの摘要を示した。摘要の(二)では「足半の原始型を求めんとする観点」での分析、(三)では「足半形態の種類の分化は主としてその用途によって規定される。」とした原始型から分化した派生型についての分析を述べている。他に類を見ない民具の内部構造写真まで引用した生物学的立証法の民俗学への応用であった。

他方「原始型」とその後の派生形質の前後関係は構造によって明らかになったものの、それがいつのことであるかという年代の特定は、実物そのものから特定することは難しい。それを補うために、絵巻を並行して利用している。絵巻物には「言葉だけの資料ではなかなか残らぬ、また残ってもよく解らぬいろいろの動作<sup>(17)</sup>」が多数掲載されており「それら事物のクロノロジーを定めるのに役立ちます。」という。また注意すべきこととして「近代に入ってから絵巻では、古いものが描かれてあってもそれは前代の踏襲が多いから信用出来ないゆえ、足利以前の絵巻を中心として<sup>(18)</sup>」慎重に史料批判の上研究を進めていた。絵巻物の中で成立年がはっきりしているものについては、足半の使用例が描かれている場合、その成立年にはその形態の足半は存在していたと証明できる。『いわゆる足半について(予報)』「摘要」の(六)では、絵巻から足半利用の歴史の変遷をあとづけて記している。彼の解釈では、中世から近世の間の時期においては武士が着用していたが、近世には武家は使用しなくなり代わりに農山海村へ普及していった。地域的に見れば文化の中心地から地方へと波及していったとまとめている。

こうして敬三は、物の構造から読み取る進化と絵巻による年代比定の2つで証明していく方法をこの足半の研究で実践し、「物による実証」に対する確信を得た。

## (2) 実物の重視

物による実証が可能であれば、おのずと実物資料を重視する。敬三は「実物」資料という言葉で文書以外の資料を呼んでいる。佐藤健二(2014)は、栄一ゆずりの実業の重視を、学問において発展させたとし、敬三の実物の重視は実地での生産や交流、労働する人間そのものを重視した栄一の「実業」とどこかで深く結びつく、と述べる<sup>(19)</sup>。物から出発し事実の観察を積み上げることで、対象の本質や全体に迫っていく帰納法に、モノがちからを発揮するという認識が、敬三にはあったことを佐藤は指摘する。敬三自身、実博の構想を後日このように述べている。

私の祖父がなくなりましたあと、私はその時分、龍門社で経済史博物館を記念に作ることを提案しました。(中略)これをやろうと思っっているいろいろなものを集めたのでありますが、だんだん戦争が激しくなったために、物だけを集めてほったらかして現在に至ったわけがあります。(中略)私はもっと物に即したような学問の仕方が、日本の学問自体にあるパーセンテージをとってしかるべきだという感じがするのであります。」「(還暦祝賀記念論文執筆者招待会席上座談話集」[渋沢1958] 493-494頁)

社会の解明は物に即してできる、物に人の経済活動の痕跡は宿ると考えていたといえる。こうしてアチックでの経験は実博へと活かされていった。

## 7. 非言語資料活用の現在

敬三が拓いた非言語資料活用、実物資料活用は、その後どのような進展があったらうか。実博コレクションの個別資料の検討に入る前に、他分野における方法論の一端を示しておきたい。

文字や数字でない情報をほかの学問分野では、方法とはいかないまでも十分なエビデンスとしては扱われている。アチックを前身とする神奈川大学日本常民文化研究所は、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を推進している。川田順造(2005)によれば人類学では、文字は一つの表象に過ぎないとする。文字は絵画と同じ二次元の表象に分類され、人類は他にも一次元(音、言葉など)、三次元(道具、立体物)、四次元(踊り・製作技術など身体表象)を持っており分析の対象として扱っている。また有形表象と無形表象という概念も用いており、日本実業史博物館で収集されていた広告や看板などは記録文書など文字と同じ有形表象のカテゴリーに属し、同様の分析対象となる。一方民俗学では、アチックの『絵巻物による日本常民生活絵引』を引き継ぎ、図像資料の範囲を広げて絵引きの編纂を進めている。そうした中で日本の歴史研究はアナル学派の社会史の影響を受けて、歴史像を図像資料によって構成し、その補強として文字資料を援用する手法が認められるようになった<sup>(20)</sup>。



このように人類学・民俗学・社会史などで非言語資料はエビデンスとしての有用性を確立している。

## 8. 日本実業史博物館で目指したことと、コレクションの示すもの

実博はアチックが明らかにした地平とは別の、アチックがなしえなかった地平を開こうとしていた。物にはひとの経済活動が見えるならば、それはどんな人々のどのような活動を見ようとしたのだろうか。

### (1) 「一つの提案」と「展観予想」

敬三は1937年5月～7月の間に「一つの提案」で「近世経済史博物館」を構想し、その一つの部門に「近世経済史展観室」を計画した。これは「経済史上最も画期的変化ノアリシ」時代として、ここには文化文政期から維新を経て明治末年に至る経済・産業の変遷、発展過程を物語る文物、器物等を陳列する。<sup>(21)</sup>4にも触れたがのちに下限を明治期としていたものを大正期までと延長した。ただし、近代工業については他機関に委ねることとし、また軍事・外交・政治・学術・芸術・宗教・貴族文化・(一般的)常民文化に関わる資料も基本的に範囲外とした。<sup>(22)</sup>

展示内容は「一つの提案」の中の「展観予想」に伺うことができる。その項目は以下のようである。完全に経済・経営という視点で収集展示を計画している。

- (1) 原始産業 ①農業 ②林業 ③牧畜 ④水産 ⑤鉱産
- (2) 基礎産業 ①軽工業(製糸・製紙等) ②化学工業(肥料・醸造)  
③重工業(製鉄・造船) ④建築工業
- (3) 補助産業 ①電気事業 ②運搬業：陸上運輸  
③商業：銀行・金融業 ④印刷業・広告業・出版業
- (4) 上記以外の実物・写真・模型 ①度量衡 ②保管器具(千両箱・金庫等) ③計算機  
④文房具 ⑤帳簿類 ⑥切手類 ⑦貨幣・藩札  
⑧広告 ⑨各種生業模型 ⑩維新前店舗様式模型  
⑪維新後の店舗様式 ⑫服飾様式各種  
⑬写真によりて示すべき各種建造物及情景  
⑭動力使用形態の変遷 ⑮通信郵便の変遷
- (5) 図表 ①一般：年表的のもの ②財政 ③土地 ④人口表 ⑤職業別人口及戸数  
⑥資本 ⑦労働 ⑧生産高発展表 ⑨物価：主要物価及指数  
⑩貿易 ⑪物価 ⑫貨幣流通高 ⑬為替相場 ⑭公社債高  
⑮其他商業及交通等各種統計又は図表

### (2) アチックと実博は、断絶か役割分担か

アチックと実博の先行研究はそれぞれあるものの、その間をつないで検討することはなかつ

たといってよい。唯一、原田健一(2010)が社会学の見地から敬三の実業家という立場が実博コレクション形成に与えた意味について分析し、その過程でアチックで得た敬三の見解に触れている。原田は主として実博と、そののちに編まれた『明治文化史』の「生活編」と「社会・経済編」を分析対象としている。

原田は、実博の中の伊勢辰が集めたコレクションを『特別展図録 日本実業史博物館旧蔵コレクション展 紙』(2007)に見て、千代紙、紙製のおもちゃ、外国人向けの錦絵など「こうした事例は国家的な政策と少し離れたところで、旧来の産業体制や、商品流通機構が解体するすき間をぬって、手工業的な商人が自らの工夫によって、新たな商品や市場を開拓していったことを示すものである。」<sup>(24)</sup>と述べた。この優れた指摘に筆者も同意見で、敬三が日本を動かす大産業だけでなく、市井に生き人々の生活に潤いを与えたいわば小生産者に対しても見落とすことはなかったことを意味している。

そして原田の指摘は実博コレクション形成における敬三の考え方に及ぶ。3章「日本実業史博物館における資料収集の過程の中で」では、敬三の社会的立場は栄一の後継者、実業家、経済史の研究者の3つが重なっており、実博構想もこれを反映して輻輳していたとしている。なかでも実業家としての経験を資料収集に反映できたと述べている。この点でも筆者も全く同感である。敬三は実業の本質や実態を見せる資料を求めたのであろうし、同時に敬三の研究者という立場では、経済史の研究素材を実博へ提供しようとしていたのであろう。

一方で、アチックの同人と敬三の間に「小さな齟齬」が生じ、実博では大きな転換をしたかのような指摘をしている。原田によると、敬三は1954年刊行『明治文化史 生活編』の「あとがきで、『アチック同人諸君の今までの関心は、近代において次第に湮滅・解体・変質する伝統的なものの方に偏していた』と興味深い不満も明らかにしている。」<sup>(25)</sup>のだという。「通常、常民、あるいは常民文化の捉え方は、伝統や規範、しきたり、習俗、慣習などの局面が強調され、人びとは相対的に固定的な広義の規範意識の中で日常の生活を営み続けるものとされる。」<sup>(26)</sup>が、敬三はそこが違って敬三にとっては「常民文化は、大きな時間の流れの中で、ゆるやかに、そして時に外との関係から変化している様相が見られると考えていた。」「そこに、アチックの同人と、小さな齟齬を生じさせた。」<sup>(27)</sup>と指摘している。原田は『明治文化史』は内容的に実博の構想と重なることとらえており、実博はアチックでの齟齬を経て大きな方向転換をしている論調である。

これに対し筆者は違和感を持つ。もとより原田論文の中心は実博でアチックではないが、そのためか、民俗学にも関心を寄せた敬三への誤解があるように思われる。『明治文化史 生活編』の「後記」にある「アチック同人諸君の今までの関心は、近代において次第に湮滅・解体・変質する伝統的なものの方に偏していた」のは、民俗学が学問としてその方向に関心を持っていたためであり、民俗学に連なるアチックの同人がこれに関心を寄せるのはいわば当然のことである。もとより敬三も一面では「アチックの標本は(中略)我々の祖先から今迄、我民俗の実生活に切実にビタリとついて居る」<sup>(28)</sup>伝統的なものを求めていたのは、彼自身の言葉からも明ら

かである。そして「常民」とは辞典でも民衆とか特権階級や有識階級を除いた人々という意味であり、そこには「<sup>(29)</sup>固定的な生活が続ける人たち」という特別な意味はない。かりに齟齬が生じてアチックと敬三の気持ちがかい離しているならば、敬三が実博構想以後もアチックを支援し、同人とともに調査行に出かけることはないであろう。<sup>(30)</sup>原田の指摘したアチックへの「不満」はそもそも1954年刊行『明治文化史 生活編』の「後記」であり、この時期にはアチックの収集活動は終了し資料もすべて寄贈した後だったが、実博も非開館を決定した後であり、編年の上で不整合となる。

事実は、敬三は実博構想後もアチックを続けた。敬三にとって、アチックと実博は並行的な役割分担だったのであろう。アチックでは豊かな成果があって、その上で実博を始めるにあたって、「展覧予想」にみるとおり経済経営、実業に関する部分に対象を狭く絞ったのであろう。

### (3) コレクションの主体

敬三は、実博では経済経営にからまる狭い分野に的を絞った。したがって収集されたのは何らかの経済活動の痕跡である。敬三はアチックを通じて、経済構造のとらえ方でいくつか気がついたことがあったのではないかと推察できる部分がある。下記に引用する資料は、安芸三津で進学を反対され親の後を継ぎ夏は漁師をしながら冬は杜氏として働く明治40年生まれ青年が、仕事の合間に瀬戸内漁民の生活をまとめた手記『安芸三津漁民手記』を1937年12月に出版した際の序文である。探求心旺盛なこの若者は、最新式の漁業を独学で勉強し知恵と工夫で業績を高めており、努力を続ける一漁民の姿に触れ敬三は以下のように思案する。

確かに同君のいわゆる科学的漁労法は現在相当程度研究され実行されている。しかしこれは国家のほかには余裕ある漁師か、または大資本にして初めてなしうるところであって、多数沿岸漁業者には多大の困難が伴っている。(中略)自分は沿岸漁業今日の実態を考えると同時にこの人間としての理想と欲求を思う時、真に胸がいたくなるような気がしてならない。[敬三(1937)『安芸三津漁民手記』「序」(進藤松司著)259頁]

さらに1937年5月にアチックの旅行で瀬戸内海中部の26島5海浜を巡った時の日記には、こんな感想が述べられている。

七、八年前、門司の出光佐三氏は瀬戸内海は将来わが国の工場地帯となると語られたことがある。今やこの予言の方向に事の実際は進んでいる。そしてあの広大な瀬戸内海全部がわが国の工場地帯の一単位として見られるほどに至ったわが国力の発展を驚嘆かつ慶賀するのであるがその一面その地帯内に古くから小さな生活が真面目に孜々として営まれていたことを忘れてはならないし、またこの生活は現代のわが国の基礎をなす一部でもあったことも忘れてはならない。[敬三(1940)『瀬戸内海島嶼巡訪日記』「小序」277-278頁]

これらは、「国力の発展」に寄与した産業、「国家」「大資本」への着目だけでなく、いわば小生産者の働きもともに両輪で研究することが必要だと、敬三は考えたのではないだろうか。それを踏まえて1954-55年刊行の『明治文化史』では以下のように試みる。

本篇編纂のねらいは、開国以来の欧米物質文化の導入が、如何にわが国民の衣食住を主とする生活相をかえたかに重点[渋沢敬三(1954)「後記」『明治文化史 生活編』745-746頁]ここで取扱うものは日常生活の消費面に現れたいわゆる物質文化の歴史に限る事にした。(中略)日本人が明治という時代に西洋文化の影響の下で、毎日の生活に新しい物品をとり入れることによって、どんな風にその生活を創り替えて行ったかをのべようとするのである。[有賀喜左衛門(1954)「第一章 序説」『明治文化史 生活編』1頁]

ここではとくに開国以来の欧米諸国からの近代的産業技術や経済制度の移植が、どのようにわが国の社会経済を変化せしめたか、という点において記述をすすめた。先に編集した「生活編」では、欧米物質文化の導入によってわが国民の衣食住の生活がいかに変化したかを究明し、主として消費面を取り上げたのであるが、この編ではさらに衣食住の生活資料の生産や流通事情がどう変わったか、それにつれて社会の状態がどのように変化したかを明らかにしようとした。(中略)執筆にあたっては、定期的に研究会を開くほか「生活編」の執筆者とたびたび会合をもって連絡し、それぞれの研究成果をたがいに交換し合うことにした。[渋沢敬三(1955)「後記」『明治文化史 社会・経済編』607-608頁]

1954年に刊行された「生活編」と1955年に刊行された「社会・経済編」は、2巻で一对をなし、生産と消費の両輪で社会経済全体を包括的にとらえようとした。また2巻の執筆に際し、研究会で内容に関連性を持たせながら進めたことがうかがえる。ここでは先ほどの小生産者への着眼とともに、消費・需要サイドへの着眼がある。

実博構想及び収集資料の意味合いは、『生活編』の内容からさらに鮮明にとらえられる。実博が設立され、展示ガイドが作られたとしたら、『生活編』の一部がそれにあたるのではないかとさえ思われる。

まず、最初に示された「一つの提案」の中の「展観予想」(前掲注23)の(4)には「⑩維新前店舗様式」「⑪維新後の店舗様式」「⑫服飾様式各種」を展示内容に挙げている。それはそのまま『生活編』の「第四章 住居と生活」の中の「第二節 江戸時代の住居 三 町屋の住居」「第四節 明治時代の住居様式 一 市区改正と新しい店舗建築」と「第二章 衣服と生活」において同じ内容が取り上げられ解説されている。

「展観原則」「展観予想」には修正意見として細かな書き込みが施されている。そこには「(三)(2)運輸業」の中で「通信一飛脚ヨリ郵便、電信、電話等ヲモ入レテハ如何」「陸上運輸(人背、牛馬背、車、人車、自転車、馬車、馬車鉄道、索道、電車、自動車、汽車、航空機等)」「水上



運輸(私船、四洋型帆船、汽船、海及河等<sup>(31)</sup>)とあり、これも『生活編』では「第五章 交通と生活」に詳述され、「(一) (1) 農業」の中で「例に麦作も入れること」とあり、これも『生活編』では「第三章 飲食と生活 第一節 在来の食料構造」に「凶作とその対策」に麦作が取り上げられている。

また収集品の中で「器物」の分類に含まれている行灯が21点ある。『生活編』では燈火について「第五節 新しい燈火の展開」として一節を設けており、その歴史の変遷を詳しく記している。以上はすべて実博の構想や収集品と対応したかたちで『生活編』に落とし込まれている。実博は経済を目で見て実物から知る、『生活編』は文章で知るというかたちとなったことであろう。実博が実現しなかったからこそ、意図をさらに深めて庶民生活への俯瞰を文章で『生活編』に記したと推察する。

ここで実博では何を表したかったのか、を改めて考えてみる。アチックでは収集・展示から「常民」をみようとした。実博ではアチックでの経験を踏まえて、「一つの提案」にみられる通り範囲を狭く、対象は貴族文化とアチックで対象とした一般の常民文化も範囲外とし、分野では経済経営に絞ろうとした。そして上記のような所感をもって、「大資本」「国力の発展」「国家」を表す資料だけではなく、小生産者の経済活動と、あるいは生産と一対をなす消費・需要を示す経済資料を集めようとしたのではないか。伊勢辰に集めてもらった外国人向けの錦絵や千代紙資料、瀬戸内沿岸の昔ながらの漁民の生活への関心などは、その証しではないか考える。実博資料38,000点の中に現在数えただけでも一割を超える広告関連資料があるのも、生産と消費をつなぐ資料として着目したのではないだろうか。

敬三がこの考え方に至った背景には、当時の経済史研究及び歴史研究の潮流があると思われる。実博を構想した1930年代は、マルクス主義の理論と方法に基づく日本社会の科学的分析の成果が次々と発表された時期である。歴史学では講座派が『日本資本主義発達史講座』において日本資本主義の構造的分析の方法を確立した。幕末開港前の経済発展段階をマルクスのいう「厳密な意味でのマニファクチュア時代」と規定できるかという論争が、敬三と懇意にしていた労農派歴史学者の土屋喬雄と講座派の服部之総との間でたたかわされた<sup>(33)</sup>。背景についてはさらなる検討を要するが、敬三は当時の学問の潮流になにか偏りを感じたのではないかと推察する。敬三は消費・需要サイドへの関心、小生産者への視座が経済史を理解するうえで重要であると考え、実博に反映させたのではなかろうか。

ずいぶん後になって敬三は、山崎豊子に以下のように話している。山崎は1957年『暖簾』を出版、同書は大阪船場の昆布問屋を舞台に戦後の動乱期を生きた商人を描いた作品である。

或る日、渋沢先生からお電話があり、「小説『暖簾』を東大経済学部の学者たちに送って読むようにすすめましたよ」と云われ、私は仰天した。(中略)「山崎さん、日本の経済史が駄目なのは、経済の理論を研究するだけで、経済を築いた人々の心の内側の問題を置き忘れていたからなんですよ。それを観察するのに小説『暖簾』が最適だと考えて、経済史学者の友人たちに送ったのです」[山崎豊子(1992)「石の地藏さん」]

理論ばかりでない研究であるために、実博があったのではないだろうか。

## 9. 実博資料の活用

日本実業史博物館コレクションは、国文学研究資料館で保管収蔵されている。資料そのものを請求し閲覧できる仕組みは整備されたが、研究者による積極的な活用はこれからである。

日本実業史博物館準備室が収集した資料は博物館建設が断念された後、1951年文部省史料館に移管され、国文学研究資料館が引き継いでいる。コレクションを知るには、1971年から1993年に刊行された書籍と、同館HPでそれぞれ一部の目録と画像が公開されており、この二つで目録はほぼ資料全点がみられるようである。

実博に関する研究は、2005年に開始された連携研究『『日本実業史博物館』資料の高度活用<sup>(35)</sup>』を核としてほかにも大谷明史(2015)、前述の原田健一(2010)などがあるものの、分野をまたいで探しても決して豊富ではない<sup>(36)</sup>。その多くが実博の成立の背景や経過に着眼したもので、収蔵されている個別の資料を活用した研究は特別展覧会など行われるに留まっている<sup>(37)</sup>。

現在島田昌和と筆者が行っている共同研究においては、個別の収蔵資料の活用を行っている。まずは広告資料に絞って閲覧調査を進めている。広告をターゲットにした理由は、まずはコレクション内の点数が多いことである。同時に島田昌和は、広告史研究には経営史学の新たな可能性があるのではないかと示唆している<sup>(38)</sup>。

実博の「広告」資料については、原島陽一(2005)が最もまとまったかたちで書いている。「広告の部」に分類されている資料を対象に、絵びら・引き札・包装紙・広告うちわなど日本の広告に登場した多様な媒体が、実博資料に含まれることを指摘、日本広告史の先行研究にある広告の種別を紹介しながら、そこに実博資料を照応させると日本広告史研究にどのような意義を持つのか、を最終的な研究目的に掲げた<sup>(39)</sup>。しかしこの「広告の部」以外にも多くの広告資料が含まれている状況を述べ、現段階では総点検する余裕はないが、目的のためにはそれらを抽出後、総合しないと正当な評価を下せないとした。

原島によれば、実博で収集し分類していた時代には「広告」という分類はなかった。文部省史料館へ移管された後に、博物館準備室時代のいくつかの資料区分のうち「絵画」のグループを史料館の方で「広告の部」「絵画の部」「写真の部」の3つに大別した<sup>(40)</sup>。そのとき全資料に目を配り、広告資料を抽出して「広告の部」へまとめる措置を講じてはいないのだという。したがって文部省史料館にて保管していた時代の「絵画」「番付」「商業器具」「書籍」の4部門にまだ多くの広告資料が含まれていると予見した<sup>(41)</sup>。現在、国文学資料館では「絵画」「地図」「番付」「竹森文庫」「古紙幣」「器物」「文書」「書籍」「広告」「写真」「準備室アーカイブズ」の11分類で保管している。

その後実博の広告関連資料に関する研究は、深化していない。同館のHPには「広告」部門として「引札類165点、ちらし17点、広告17点、略暦引札27点、商標ラベル201点など572点です。」と説明されている。昨今整備されたデータベースで目録から検索してみると、原島の予見通り

ほかの部にも確かに広告に関する資料が多数見つかった。島田昌和(2016)の企業家研究フォーラムでの調査結果の発表で「広告」部門以外からも広告関連資料を抽出して、合計4,571点あることがわかった。それに加えて2016年9月までに個別資料の実見調査を実施した結果、「文書」と「書籍」の分類の中に、あらたに43点が見つかった。それによって広告関連の資料数は、現在少なくとも4,614点あることがわかった。図1は実見した個別資料43件の一覧である。これらを使った先行研究は、管見に入る限りない。個別資料への研究は別稿に譲る。

貼込帳はいわゆるスクラップブックで、広告類がまとめて貼り込まれている。その一冊一冊にいわゆる引き札や、カード型、うちわといった広告が数十点貼り込まれている。中には広告でないものもときに含まれるので、一点ごとに精査する必要がある。これまで実見調査をした中から例を述べると、資料番号4777の「広告団扇貼込帳」は、貼込帳の中に73件の広告団扇の台紙が貼り込まれている。団扇をまとめて一瞥すると、変形円の限られた空間に収めるメッセージは、ある程度の定型を見ることができる。一方で団扇として美しければ美しいほど人に頻繁に長く使われ、宣伝効果も同時に高まるため、斬新さや華麗さを競っていることがわかる。

資料番号695の「宿屋引札貼込帳」は貼込帳に100件の札が貼りこまれている。同じように一瞥すると、長方形で手のひらより少し大きいサイズで統一されており、宣伝のしかた引き札の用い方にパターンがあったことを物語っている。今後は個別資料の調査分析を行い、広告・デザインといった領域で経営史学のアプローチを試みていきたい。

請求番号	資料名・表題	西暦	作成・差出	数量	法量
37TGH/0042-0000-0000	(改良農具等広告類)	無年		11 枚	
37TGH/0051-0000-0000	貼込帳 (ひき札他)	無年		1 冊	39
37TGH/0073-0000-0000	売薬広告集 貼込帳	1883		1 冊	27 × 32?
37TGH/0074-0000-0000	をた末き 衛生	1898	(浅草橋外瓦町) 平野	1 冊	31?
37TGH/0075-0000-0000	化粧品?海苔御茶?御酒?広告帳	無年		1 冊	34?
37TGH/0084-0000-0000	度量衡広告	1903		1 綴	28?
37TGH/0105-0000-0000	(生糸広告貼込帳)	1883 頃		1 冊	19 × 18?
37TGH/0265-0000-0000	日本石油株式会社営業広告 刊	1957			56p、23?
37TGH/0388-0004-0000	第四回国庫債券償還広告	1903			56p、31?
37TGH/0388-0005-0000	第五回国庫債券償還広告	1906			24p、31?
37TGH/0494-0000-0000	宿屋広告駅通局関係等貼込帳	1907 辺り? 1926 辺りカ		1 冊	34?
37TGH/0540-0000-0000	小間物屋の広告貼込帳	1890 ?		1 綴	28 × 45?
37TGH/0541-0000-0000	米屋の広告貼込帳	1887?		1 綴	28 × 45?
37TGH/0603-0000-0000	軽便有益厨爐広告書	1891	東京 紀伊国屋竹内倉吉		10 p、 17?
37TGH/0681-0000-0000	(貼込帳)	1830-1926 ?		1 冊	31
37TGH/0695-0000-0000	宿屋引札貼込帳	1890?		1 冊	34
37TGH/0696-0000-0000	宿屋史料 (貼込帳)	1875-1898?		1 冊	39
37TGH/0698-0000-0000	広告貼込帳	1878 ころカ		1 冊	32?
37TGH/0699-0000-0000	明治広告集 (貼込帳)	1883		1 冊	27 × 32?
37TGH/0738-0000-0000	(貼込帳)	1905 ころカ		1 冊	27 × 39

請求番号	資料名・表題	西暦	作成・差出	数量	法量
37TGH/0739-0000-0000	(貼込帳)	1926 (1913) ころか		1冊	28 × 40
37TGH/0743-0000-0000	(貼込帳)	1893 ころか		1冊	23 × 31
37TGH/0747-0000-0000	(貼込帳)	1868 ~		1冊	38
37TGH/1460-0000-0000	名産岐阜提灯の広告	無年	岐阜市小熊町 岐阜物 産品製造本舗尾関治七	1枚	24 × 27?
37TGH/1480-0000-0000	(諸墨製造販売) 小坂屋広告	無年		1枚	68 × 26?
37TGH/1612-0000-0000	靴製造販売 (広告)	無年	(京都) 玉水商店	1枚	31 × 37?
37TGH/1614-0000-0000	ゴム製品広告	無年	神戸 ラバ商会	1枚	25 × 53?
37TGH/1615-0000-0000	堅鋸製材機械広告	無年	美濃岐阜 馬淵鉄工場	1枚	25 × 35?
37TGH/1616-0000-0000	ネスル、スウキス、ミルク 広告	無年		1枚	23 × 15?
37TGH/1618-0000-0000	蓄音器 広告	無年	米国コロンビア蓄音器 製造会社代理店三光堂	1枚	19 × 27?
37TGH/1619-0000-0000	原動要力車 広告	無年	札幌 安達要吉、札幌 浅井源治郎	2枚	18 × 27?
37TGH/1620-0000-0000	綜統調製機械広告	無年	尾張一宮 野田商会	1枚	18 × 26?
37TGH/1621-0000-0000	津田式動力織機・津田式管巻機 (広告)	無年	(金沢)、水登機業部	1枚	23 × 31?
37TGH/1622-0000-0000	除草器 (一豊年車) 広告	無年	(岩代国高野村)、高橋 佐平	1枚	27 × 38?
37TGH/1623-0000-0000	第五回内国勸業博覧会記念帛紗御礼売出 広告	無年		1枚	20 × 27?
37TGH/1624-0000-0000	福島県名産相馬陶器 (広告)	無年		1枚	25 × 35?
37TGH/1627-0000-0000	衛生はら掛 広告	無年	第5回博覧会大阪売店 内米津商店	1枚	23 × 32?
37TGH/1629-0000-0000	信濃鎌広告	無年	大阪府第五回内国勸業 博覧会 長野県鎌共同組合売店	1枚	27 × 50?
37TGH/1631-0000-0000	台湾茶広告	無年	第五回内国勸業博覧会 台湾館内台湾喫茶店	1枚	
37TGH/1659-0000-0000	吉徳商店際物部広告	無年	東京 山田啓蔵	1枚	25 × 35?
37TGH/1662-0000-0000	南洋綿実油粕販売広告 諸油機械製造場	無年	(北埼玉郡村君村)、三 田金兵衛	1枚	25 × 34?
37TGH/2022-0000-0000	福聚海無量 (貼込帳)	無年		1冊	31
37TGH/4777-0000-0000	広告団扇貼込帳			1冊	36 × 34

図 1

本表は日本実業史博物館コレクションデータベース7) 文書8) 書籍の分類から広告関連資料を筆者が抽出したものである。

## 10. おわりにかえて

本稿では敬三の経済観の再構成を、敬三の研究拠点だったアチックと実博の関係のなかで行なった。敬三の経済観を再構成することは、敬三が経済活動の証左として実博に集めた資料を経営史分野で活用する可能性を探るためである。

1925年にアチックを設立してから1937年にアチックでの資料収集が終了し、同時に実博の構想が提案され、実博としての資料収集が始まる中で、アチックでの経験は実博の構成に存分に活かされていた。

敬三は物を通した生物学的な実証研究をアチックで行なっていた。敬三は足半という履物の分析にいわば生物学の分岐分類という手法を応用したとみられ、たくさんの足半をその構造から生物学でいう構造形質から原始的な形質とその後に出現した派生形質とに分けた。それに



よって文書を使わずに足半の編年を明らかにした。加えてその編年の年代を特定するために絵巻物を活用し、絵巻物の成立年からどの年代にどの形態の足半が存在したかを割り出した。この方法で敬三は、物からの実証研究に確信を得た。そこからこのような物に即した学問の仕方があっていいと願って、実博でも実物を重視し、収集資料の半数以上が実物資料・非言語資料という構成になった。敬三のアプローチが有効であることは、非言語資料が人類学・民俗学・社会史の分野で、十分なエビデンスとしての有用性を確立していることから明らかである。経営史分野においても物に即した実証研究は可能性があるといえる。

物による実証研究を追求した敬三が、実博で示そうとしたのは、人々の経済活動であった。アチックでは特権階級ではない人々である「常民」の文化を対象としたが、実博では対象を絞り、実業に関するものとした。そこからみえる人間の活動は、おのずと経済活動が中心となる。そこに見える敬三の経済観は国力の発展に寄与した産業や、大資本への着目だけでなく、小生産者への視点を持ち、あるいは生産製造の面だけでなくそれと一対をなす消費面、需要サイドを重視するものであったことを、彼の言葉から明らかにした。

敬三がこうして実証研究の素材として集めた実博資料であるが、個別資料の調査研究はほとんど行われていない。そこで広告・デザイン分野に絞って未発表の個別資料の調査を進めつつある。広告関連資料は、現段階で公表されている資料数よりもさらに多いことが、今回の調査により判明した。今後は、実博資料中の広告・デザイン分野の資料について分析を進め、敬三の生産製造以外への関心について検討を深めたいと考えている。

#### 文献一覧

- ・青木陸(2007)「幻の日本実業史博物館紹介—実業史の中の紙」国文学研究資料館編『特別展図録 日本実業史博物館旧蔵コレクション展 紙』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館、VI-VII
- ・青木陸(2008)『「日本実業史博物館」資料の高度活用 2007年度中間報告(人間文化研究機構総合推進事業連携研究「文化資源の高度活用」)中間報告』国文学研究資料館
- ・アチック・ミュージアム編(1936)『所謂足半に就いて』(『日本常民生活資料叢書 第一巻』(株)三一書房、1972年371-624頁に再録)
- ・有賀喜左衛門(1954)「第一章 序説」渋沢敬三編『明治文化史 第12巻生活編』(株)洋々社、1-8頁
- ・有賀喜左衛門(1972)「日本常民生活資料叢書総序 — 渋沢敬三と柳田国男・柳宗悦」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書 第1巻』(株)三一書房、11頁
- ・有賀喜左衛門(1984)「絵引によせて」渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引 第1巻』(株)平凡社、x-xiii
- ・石井寛治(2003)『日本流通史』有斐閣
- ・石原武政・矢作敏行編(2004)『日本の流通100年』有斐閣
- ・大谷明史(2015)『渋沢敬三と竜門社 — 「伝記資料編纂所」と「博物館準備室」の日々』勉誠社(株)
- ・粕谷誠(2012)『ものづくり日本経営史』名古屋大学出版会
- ・刈田均(2002)「第4章2. 日本実業史博物館」横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団、126-129頁。

- ・川田順造(2005)「非文字資料から見る人類文化」『非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録』神奈川県立21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」、3-6頁
- ・国文学研究資料館編(2007)『特別展図録 日本実業史博物館旧蔵コレクション展 紙』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館
- ・近藤雅樹編(2001)『図説 大正昭和 くらしの博物誌 —民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』、河出書房新社
- ・近藤雅樹(2007)「アチック・ミュージアムと紙」国文学研究資料館編『特別展図録 日本実業史博物館旧蔵コレクション展 紙』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館
- ・佐藤健二(2014)「渋沢敬三における『もうひとつの民間学』」神奈川県立日本常民文化研究所編『歴史と民俗30 神奈川県立日本常民文化研究所論集30』(株)平凡社
- ・渋沢敬三(1933)「アチックの成長」『祭魚洞雑録』(『渋沢敬三著作集 第1巻』平凡社、1992年に採録)
- ・渋沢敬三(1936)「いわゆる足半について(予報)」(『渋沢敬三著作集 第 巻』(株)平凡社、1992年235-244頁に再録)。
- ・渋沢敬三(1937)「『民具問答集』第1輯まえがき」(『渋沢敬三著作集 第3巻』(株)平凡社、1992年249-254頁に再録)
- ・渋沢敬三(1937)「序」進藤松司著『安芸三津漁民手記』(『渋沢敬三著作集 第3巻』(株)平凡社、1992年、255-259頁に再録)
- ・渋沢敬三(1940)「小序『瀬戸内海島嶼巡訪日記』」(『渋沢敬三著作集 第3巻』(株)平凡社、1992年、275-278頁に再録)
- ・渋沢敬三(1941)「所感 —社会経済史学会第11回大会あいさつ」(『渋沢敬三著作集 第 巻』(株)平凡社、1992年605-619頁に再録)。
- ・渋沢敬三(1954)「絵引は作れぬものか」(『渋沢敬三著作集 第3巻』(株)平凡社、1992年142-145頁に再録)
- ・渋沢敬三(1954)「後記」渋沢敬三編『明治文化史 第12巻生活編』(株)洋々社、745-746頁
- ・渋沢敬三(1955)「後記」渋沢敬三編『明治文化史 第11巻社会・経済編』607-608頁
- ・渋沢敬三(1958)「還暦祝賀記念論文執筆者招待会席上座談話集」(『渋沢敬三著作集 第3巻』(株)平凡社、1992年484-507頁に再録)
- ・渋沢史料館(1988)『特別展図録 屋根裏のはくぶつかん—渋沢敬三と民俗学』渋沢史料館
- ・渋沢史料館(2001)『企画展図録 日本実業史博物館をつくりたい!! 渋沢敬三の構想と蒐集品』渋沢史料館
- ・島田昌和(2016a)「渋沢敬三の社会経済思想—実業史博物館構想に見る経営史アプローチ」企業家研究フォーラム2016年度年次大会
- ・島田昌和(2016b)「非言語情報を用いた新たな経営史分析手法の提起—渋沢敬三の社会経済思想と実業史博物館構想をヒントとして—」経営史学会第52回全国大会(川越仁恵との共同発表)
- ・神野由紀(2015)『百貨店で<趣味>を買う—大衆消費文化の近代』吉川弘文館
- ・田村均(2004)『ファッションの社会経済史』日本経済評論社
- ・中村俊亀智(1983)「アチック・ミュージアムの足どり —収蔵原簿の分析から—」国立民族学博物館編『国立民族学博物館研究報告 8巻3号』国立民族学博物館、587-611頁
- ・中村正則(1984)「Ⅰ 民衆史の座標軸 Ⅱ 民衆史・第四の波」『日本近代と民衆 個別史と全体史』校倉書房、15-19頁
- ・中村正則(1984)「Ⅱ 近現代史の再構成 Ⅳ 講座派理論と我々の時代」『日本近代と民衆 個別史と全体史』校倉書房、231-258頁

- ・原島陽一(2005)「日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち『広告の部』資料について」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇 第1号(通巻第36号)』、国文学研究資料館、123-140頁
- ・原田健一(2010)「モノをめぐる渋沢敬三の構想力 ―経済と文化をつなぐもの―」神奈川大学国際常民文化研究機構編『神奈川大学国際常民文化研究機構 年報第1号』神奈川大学国際常民文化研究機構、29-41頁
- ・福田アジオ(2002)「渋沢敬三と民俗学」横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編『屋根裏の博物館 ―実業家渋沢敬三が育てた民の学問―』、横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団、80-82頁。
- ・福田アジオ(2005)「図像資料としての素人絵 ―生活絵引き編さん資料としての可能性―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化 第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、1-16頁
- ・藤井裕之(2010)「アチック・ミュージアムの足半収集の経緯」国立民族学博物館編『国立民族学博物館 研究報告 35巻2号』国立民族学博物館、363-384頁
- ・横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編(2002)『屋根裏の博物館―実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団
- ・山口和雄(1992)「解説／渋沢敬三、人と仕事―戦前を中心に」渋沢敬三『渋沢敬三著作集第 巻』(株)平凡社、623-644頁
- ・山崎豊子(1992)「石の地蔵さん」『渋沢敬三著作集 月報 』(株)平凡社
- ・山田哲好(2001)「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」近藤雅樹編『図説 大正昭和 暮らしの博物誌 ―民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』、河出書房新社

(注)

- (1) たとえば経営史学会編(2015)『経営史学の50年』(日本経済評論社)をみても、デザインや視覚情報へアプローチする研究は見当たらない。小経営、地域発展、繊維というテーマの中にも見つけることができなかった。また経営史学会編・山崎広明編集代表(2004)『日本経営史の基礎知識』(有斐閣)の項目にもデザイン、意匠などは見当たらなかった。
- (2) 渋沢敬三の著作には数えきれないほど登場する言葉である。
- (3) 福田アジオ(2002)81頁
- (4) 敬三(1936)「アチック根元記」(『渋沢敬三著作集第3巻』(株)平凡社、1992年に再録)よるとのちにアチック・ミュージアム・ソサエティと名づけられる会の第1回会合は1921年であった。しかし福田(2002、80頁)によると研究拠点として本格的に設立されたのは1925年であるとされる。
- (5) 足半とはどんなものかをアチックの同人であった有賀喜左衛門(1972)が適切に述べている。「普通の草履の半分の形で足の裏の半分にあたる小さな形のもので、鼻緒が結ばれており、足裏の前半に力のかかる労働には特に有用なものであった」。
- (6) 渋沢敬三(1936)235-236頁
- (7) 藤井裕之(2010)377頁。
- (8) 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編(2002)39頁
- (9) 渋沢(1933)14頁
- (10) 渋沢(1937)、253頁
- (11) 大谷(2015)、82-86頁
- (12) 中村俊亀智(1983)、590頁
- (13) 大谷(2015)99頁

- (14) 青木(2007) VI - VII
- (15) 渋沢(1933)、14頁
- (16) 有賀(1972)、5頁
- (17) 渋沢(1941)、607頁
- (18) 渋沢(1954)、144頁
- (19) 佐藤健二(2014)、76頁-77頁
- (20) 福田アジオ(2005)、1頁
- (21) 青木陸(2008)、21-22頁
- (22) 大谷(2015)、83-85頁
- (23) 青木(2008)、21-22頁
- (24) 原田健一(2010)、35頁
- (25) 原田(2010)、32頁
- (26) 原田(2010)、35頁
- (27) 原田(2010)、36頁
- (28) 渋沢(1933)、17頁
- (29) 柳田国男監修民俗学研究所編(1951)『民俗学辞典』東京堂出版、「常民」の項282-283頁
- (30) 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編(2002)、154-155頁の年譜には、1939年収蔵品を日本民族学会付属博物館へ移管した後もアチックの活動を共に続けたことが示されている。
- (31) 青木陸編(2008)、29頁
- (32) 前掲注31
- (33) 中村正則(1984)17頁、236-237頁
- (34) 『史料館収蔵史料目録 第11集』(1971年)、『史料館叢書 別巻1 明治開化期の錦絵』(東京大学出版会、1989年)、史料館収蔵史料目録 第57集』(1992年)、『史料館叢書別巻2 江戸時代の紙幣』(東京大学出版会、1993年)
- (35) 『文化資源の高度活用 「日本実業史博物館」資料の高度活用(人間文化研究総合推進事業 連携研究中間報告書)』(研究代表者青木陸)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、2008年
- (36) 科学研究費補助金特定領域研究( )「日本実業史博物館構想のもとに収集された産業経済資料の基礎的研究」(研究代表者丑木幸男、2002～2003年)及び「日本実業史博物館構想による産業経済コレクションの総合的調査研究」(研究代表者丑木幸男、2004～2005年)、他には大谷(2015)p.107-108のリサーチに詳しい。
- (37) 展覧会は国文学研究資料館『幻の博物館の「紙」—日本実業史博物館旧蔵コレクション展』(2007年)、渋沢史料館『日本実業史博物館をつくりたい!!: 渋沢敬三の構想と蒐集品』(2001年)など。
- (38) 島田昌和の企業家研究フォーラム2016年度年次大会における発表による。
- (39) 原島陽一(2005)、131頁
- (40) 原島(2005)、124頁
- (41) 原島(2005)、131頁
- (42) 「電子資料館」の「日本実業史博物館コレクションデータベース」<http://base1.nijl.ac.jp/~jituahaku/>

**[謝辞]** 本稿を書くにあたり、共同研究者の島田昌和氏、国文学研究資料館の青木陸氏にはたくさんのご教示、ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(2016.10.14 受理)